

Ⅳ 「人文学フィールドワーカー養成プログラム」調査報告

新しい楽器考証学

——名笛「錫杖丸」研究と南都系楽人説話領域の解明に向けて

猪瀬千尋

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程2年

I 調査の概要

1 地下楽人と南都系

地下人であり、世襲の音楽者の家のことを（重代の）地下楽家と呼ぶ。彼らは内裏や寺院の楽所に所属し舞楽を司っていた。院政期以降、彼ら地下楽家によって多くの楽書が作成された。そこでは演奏での実際の知識のみならず、説話的要素を含む話も書かれ、それらは当時の説話集に関わるものが少なくなかった。特に狛近真による『教訓抄』（1233年成立）、その孫、狛朝葛による『続教訓抄』（1320年頃成立）、豊原統秋『体源鈔』（1512年成立）などはその内容も豊富で、多方面から文芸との関わりが指摘されている。

2 地藏菩薩靈驗記について

フリーア美術館が所蔵する《地藏菩薩靈驗記絵》は、13世紀中～後半の作と推定されながらも錯簡や脱落、画面の剥落が著しく、その制作者・制作事情などすべて未詳のままであって、未だその内容についての研究が美術史・文学史ともに進んでいない絵巻である。もとの話数については不明だが、原状の復元を通して全六話の配列が仮定されている。そのうち第四話は、南都系楽人狛氏についての逸話であり、狛行高の靈驗記として以下のように語られる。

狛行高か強盗の難をのかるゝ事／永久のころ、狛行高といふ左の舞人ありけり若より地藏菩薩を信してあさゆふ地藏の宝号をとなへけり笛を吹ければ楽一を吹ても南無地藏菩薩といひて春日大明神にそ法樂したてまつりける或夜強盗みたれいりてにくへき程もなかりければせむかたなきあまりにまくらにをきたる横笛をとり大刀にうちあはせて南無地藏菩薩〜とそ口けるさる程になにとかし[た]りけん強盗皆にけかへりぬ我命はたすかりたれとも命にもかへむとおもひつる笛はさためて損し[ぬと]おもひてふきてみるにすこしもそんせす不思議におほえていよ〜地藏の宝号をとなへてゐたるにこの強盗佐保川の辺[まてにけ]たりけるかすへてえのひさら

[す]してみなとらへられにけり／夜あけぬれはからめたりつる盗人とも行高か家にくしてゆきて事のよしをとひければ家へ打入て侍つれば地藏菩薩の錫杖にてうちはらはせ給つるにたゆへくもなくおそろしくおほえてものたらむの心もなし急にけかへりつる程にさほかはの辺にて又小法師一人きたりて西へゆかむとすればやゝといふ東へゆかむとすれば又やゝといふ南北へゆかむとするもたちはたかりてやゝといひつるかいかに候ひつるやらんおそろしくいつかたへもまかり候はてとらへられ侍と申けりさて其行高か笛をは其後錫杖とそなつけゝると申つたえて侍り 《地藏菩薩靈驗記絵》第四話

地藏菩薩の靈驗譚であるとともに、「錫杖」という笛を巡ってのいわゆる「名器譚」である。『教訓抄』巻七にその原型が見られる以外、現行の地藏菩薩に関する靈驗記や、中世の説話集や楽書に同話を見出せない。

3 「狛氏家伝」

しかし錫杖丸の存在を示唆するものが林鷲峰の全集『鷲峰林学士文集』の中に存在する。

笛之為名、所以滌邪穢納之雅正也、故其調一定、絃歌皆從、創於黃帝、作於漢武賦於宋玉馬融（中略）尾張連浜主、承和年中入唐、伝此芸之秘、帰為一流之祖、其後師資相承、至狛行高、其技彌精、而伝其門、有一名管、称錫杖丸、所以其名之、家記備矣、五世孫近真、声值籍甚、其三男真葛以降、世々綿々、不隕其聲、以至故越後守近直、其子近豊、襲任越後守号、叙従四位下、毎歳赴南京、調錫杖丸、以勤春日之神事、寛文中、今上皇帝御笛始之時、殊応精選、辱候／御師範、爾来屢奉授秘曲、乃知一芸之達不忝祖先誠為一家之美談也、今秋近豊東來、告余以前件、請記其家伝所由来、余嘉其伝承之不絶、以為之証云爾（「狛近豊家伝笛記」『鷲峰林学士文集』十二）

ここでは錫杖丸が行高以降、真葛を経て、近豊にいたるまで連綿と受継がれたことが書かれているが、真

葛は近豊の家である上家の始祖であり、このことから錫杖丸が狛氏の中でも上家相伝の楽器であったことが理解される。

さらにここで『大日本人辞書』の狛近豊の項目を見ると次のことが書かれている。

上 近豊／本性は狛，南都の楽人にして，近真の二男なり。幼より音律に敏にして，業を父近真に受け，技芸高妙，長ずるに及んで其蘊奥を極め，其道の名家なり。明暦二年（一六五六），従五位に叙せられ，越後守に任ず。靈元天皇，特に近豊を挙げて，御笛の師範に任じ給ふに及び，声値，更に籍甚なり。然るに，近豊，家貧にして，借鬼日に迫る。近豊，磊々，少しも介意せず。債主。却て窮し，近豊に迫る，愈々急なり。人あり，其伝家の名笛，錫杖丸を奉獻して其債を償はんことを勧めたり。近豊，已むことを得ず，之を諾し，將に獻ぜんとするに当り，伝家の重宝にして，且つ近豊が常に信仰せる，地蔵菩薩の古像に対し，自から蘇合香一具を奏す。其音凄絶，聴者みな，涕泣せざるなし。遂に。之を靈元天皇に献ず。天皇，大に嘉賞せられ，黄金一百両を賜ふ。其後，朝廷，此笛を近衛家に賜ふ。今なほ，近衛侯爵家に存在せり。近豊は，元禄五年（一六九二），正四位上に進み，同年七月二日，卒す。年七十二。[上氏家伝，錫杖丸記]

ここに錫杖丸が「伝家の重宝」であって，しかも地蔵菩薩の像が刻まれてい，上家に地蔵信仰があったことも知るのである。しかしその笛は自家の貧窮のため，彼が御師範を務めていた靈元天皇に奉られ，その後近衛家の手に渡ったのだという。

4 その後

さて靈元天皇に奉られ，その後，近衛家の所有となった錫杖丸はそれからどうなったのであろう。実は現在，彦根城博物館に「錫杖丸」という笛がある。

彦根藩の一四代目藩主・井伊直亮（1794～1850）は多くの楽器を蒐集しており，その一群の多くが今の彦根城博物館に残っているが，その井伊直亮が著した楽器目録『楽器類留』には錫杖丸の名がある。

もと狛氏家〈当時上右近将監家〉器ニ候処，百七十八年以前より，近衛殿御所蔵に相成候。右管を獅々田初代相写候管にて，私親代より持伝候事候／此笛ハ，阿部季良，彦根表江来ル節，令予伝与処也（切紙一通挟み込み）此笛ハ，季良家，其頃家族多く，難渋ニ願候旨も有之ニ付，無抛所，及助勢候故其礼等ヲ含ミ，譲リ呉候趣ニ而，即夕顔筆策と同時ニ

而，則手紙ニも兩管一緒ニ認メ込有之候故，手紙ハ夕顔之方ニ一緒ニ添置物也

ここに上家相伝の錫杖丸が，笛作りの名家・獅子田家の初代によって模造され，その後，安倍家より井伊家に奉られたことがわかる。つまり中世の《地蔵菩薩靈驗記絵》に登場した笛は，レプリカといえども現存していた。

本プロジェクトでは，彦根城博物館所蔵の錫杖丸模造品の調査とともに，現在の楽器考証の現状について聞取を行ったものである。

II 調査の前提としての調査

1 目的と方法

実際の楽器を調査するには困難が伴う。

それは，絵画や彫刻，そのほかの工芸品に比べ，楽器は美術史的な研究が進んでいないからである。もちろん，正倉院の楽器（五絃琵琶など）や，春日大社の国宝・蒔絵箏など，美術的価値が高い楽器については研究の蓄積もある。

しかし，本プロジェクトで調査する楽器は，地下の家に伝わった楽器であり，美術的工芸的価値が高いとは必ずしも言い切れないものである。錫杖丸の他にも，本邦には多くの名器が存在しているのにも関わらず，十分に調査されていないケースが多いように思われる。実際，古楽器について，どのように計測をし，どのように文章化すればいいかという方法論は，未だ確立していない。それは，そもそも楽器自体の考証学が進んでいないからであり，銘や由来書の他に，考証をするべき手段が確立していないためである。

そこで本プロジェクトでは，第一に南都系説話領域の解明を目指しつつ，第二に楽器をいかなる形で調査するか，その方法を明確化することを目的とした。特にフィールドワークを通して得られるのは第二の点であると考え，楽器考証の方法論について，幾つかの視点から考察をした。

まず，一つ目は実際の職人への調査・聞き取りである。今現在，笛の作成に携わるものが，どのような形で楽器を作成しているか，抑えておく必要がある。二つ目は，当時の笛の作成方法はいかなるものであったかの調査である。具体的には，横笛についての作成・修理の方法を述べる文献を調査であり，当時の技術に庶幾する形で，実物を見ることを目的とする。三つ目は，現在の楽器考証学の文献の整理である。上述したように，楽器の考証は，他の工芸品に比べ必ずしも十

全とは言い難いものがあり、各研究機関・博物館がどのような形で、これを行っているか、まとめる必要がある。

ここでは、上記の三つのうち、フィールドワークに関わる問題として、一つ目と二つ目、すなわち現在の技術と当時の技術がどのような形で存在しているかを明らかにしたい。

2 現在の技術

古楽器の作成に携わるA氏によれば、現在の横笛の作成手順は以下の通りである。

基本的な部材、すなわち管部は竹であり、吹口面（首部分）に節を置く。吹口面より上面には蠟をつめて塞ぐ。蠟によって音の高低が決まる（蠟が多いほど高音である）。次に孔部を除く管の面を、細く削いだ櫻の皮でもって巻き付ける。これを樺巻という。次に、首部先端に鉛を詰めて固める。吹口を中心として均衡を保つことによって、安定した演奏姿勢を得るためである。鉛の上から円く削った木を収め、そこに蒔絵・錦などを施す。また、管部・樺巻部に漆を施す。

以上が、簡略にまとめた笛作成の手順であるが、その考証には困難が伴うという。まず、古笛の一形態として管内部に彩色が施されていない・樺巻部が一枚皮などになっているものもあるというが、実際は近世の修理などで、変容している可能性がある。また、近世に流行した笛の材質（竹の種類）があり、もともとの材質と違った形で伝承されていることもある、ということであった。また笛の測定に関しても、実際に使用された楽器の場合、孔部などが磨れて肥大している場合もあり、正確な数値は得難いという。

なお氏によって、横笛の測定の方法を学んだので、それに基づき実際の調査を行うこととした。

3 当時の技術

当時の形に即した考証学を行うために、本プロジェクトでは古文書の調査を試みた。実際に調査したのは、近世にかけての笛の作成修理のテキストである。例えば日本音楽史研究所に所蔵される『笛製考』は、文化4年（1807）に堀田正毅によって著されたもので、松平定信の序を持つ笛の作製本である。『笛製考』の中で興味深いのは、当時の調査方法に基づく形での

測定が得られていることであり。それによれば、胴回りの太きなども測定対象となっていた。なるべく古い形での調査方法に則するためにも、本調査では、現在の調査方法に加え『笛製考』の方法も加えてみることにした。

III 現物の調査

彦根城博物館所蔵「錫杖丸」模造品について、概略はIに記したので、その調査結果のみ簡略に記す。測定結果は別紙に記した（単位はミリで表記）。

- ・竹製樺巻
- ・谷剝あり
- ・樺巻部を漆塗、管内部・孔部を朱漆塗
- ・頭部……金欄の栓
- ・蟬……彫りあげる

目を引いたのは、その笛筥や笛袋の美しさである。これらはみな井伊直亮が設えたものであり、笛筥に見える「錫杖丸」の文字も、直亮自身の手によるものだという（学芸員の方のご教示による）。付属品として、錫杖丸（模）が安倍家より井伊家に渡った過程が記された文書があり、一部の内容は『楽器類留』と相応するものであった。

IV 結 論

本プロジェクトは南都系説話領域の解明への階梯として、上家に伝わった横笛・錫杖丸の模造品についての調査と、そのための過程について記した。

中古から現代にいたるまで多くの名器が存在しているのにも関わらず、その実態が広く解明されることはなかった。本プロジェクトでは、そのような名器が持つ言説の場を究明すべく、近世まで南都系楽人の上家に伝承された笛に焦点をあて、その伝来と模造品の実物について調査を行った。

現代の笛職工と、近世の笛作成書との比較を通じて明らかになったのは、時代ごとの測定方法の差異と、その時代ごとの楽器のとらえ方の違いであった。また実際に錫杖丸（模）に付属した文書により、前段階の研究で明らかになっていた伝来の事実が、より裏付けられたと言えよう。

